

帯広駐屯地西側の西官舎近くで遺跡の発掘調査が行われている。帯広駐屯地が所在する緑ヶ丘では、旧石器時代から縄文時代の遺跡が幾つか見つかっており(現駐屯地の下には大規模な遺跡が眠っているのではないかなどと考えると、ロマンを感じる)、現在発掘中の「若葉の森遺跡」もその一つである。概地区が弥生新道に掛かるために調査が行われているものだ。地表より約30センチ下には縄文時代(4~5000年前)の竪穴住居、土坑、土器や石器が、更に50センチほど下の旧石器時代の粘土層(約2万年前の地表)からは、黒曜石で作った石器等が見つかっている。今年9月末まで作業が行われているので、遺跡を見学させて頂いて、古代の十勝に思いを馳せるのも一興ではなかろうか。

さて！まるで短い夏を精一杯楽しむかのように管内は何処も花盛りである。小生の毎朝のジョギングコースも色とりどりの花が咲き誇っている。家々の庭先に、玄関先やベランダのプランターにも畑の畦にも、更には街路樹の根元の花壇にも、公園のお花畑や木々もとどりの花をつけている。

不思議に感じることは、初春のレンゲ草が咲いているかと思えば、紫陽花もあり、初秋のコスモスや萩の花も咲き始めているということだ。花咲く時期が一気に凝縮されているようだ。

花は不思議な力を持っているといわれる。その例を紹介しよう。北十勝の鹿追町は、町長の発意で、花一杯運動を展開し、昨年(平成13年)7月には第3回花サミットが同町で開催された。聞けば、全国からも同町の花一杯運動の活動状況を視察に来る人が引きも切らないと言う。同町が「花と芝生のまちづくり」を始めるきっかけは北海道認定のフラワーマスター(花の育成管理に関するリーダー)に30名余りが認定されたことがあるようだ。更に環境美化の中心に花を取り入れて綺麗な通りになれば、まさかそのような通りにはゴミを捨てる様な不心得者は自然といなくなるだろうと。確かにそうだろう。これが第一の効果だろう。

また、花作りの効果としては、コミュニティの復活だ。同じく鹿追町の例であるが、町の補助もあり、花を作る人が次第に増え、その花が取り持つ縁で、今までは挨拶を交わす程度であった近所付き合いが深まったようだ。花という共通の話題が出来、次第に親しくなっていくようだ。

また、ささやかなライバル心から、研究心と創意を持って花を育てようとし、それが生き甲斐になっていくから花の魅力は深い。

人の心を綺麗にし、コミュニティを復活させ、生き甲斐にもなりうる、そんな摩訶不思議な力があるから花は偉大だ。

小生がジョギングしている通りでも、あれは春先であったろうか、町内会か老人クラブかが総出で街路樹の根元に作られた花壇を掘り起こし、ある日には花を植栽していた。それが今では真っ赤になって通りに潤いを齎してくれている。共同の花植栽作業は通りを綺麗にし、通行する人を幸せにし、地域の一体感を助長するという一石二鳥、三鳥の効果があるようだ。

小生の手元にある鹿追町長から頂戴した、「花大好き！町民の集い」（昨年版）のパンフレットによれば、平成13年度から設けられた北海道主催の「北のまちづくり賞、花と緑部門」において同町のアートロード商店街、十字街地区商店街が見事知事賞に輝いた。今年も昨年同様切れに飾り付けられていることだろう。トピアリーと称する植物を人工的そして立体的に造形する技術を使った可愛い動物やその他の各種のトピアリーが出迎えてくる筈だ。また、アートロード街は、いわば飾り窓画廊の態を為している。

また、家々の庭先や街路の植樹柵には季節の花が咲き誇り、正にフラワーロードと称するに相応しい。



トピアリー（撮影：H14/8/3）

（参考：鹿追町のパンフ・HP、帯広百年記念館のパンフ等）